

## 交流活動を通して思考を深めることで、自分の読みを広げていく子ども

— 小学4年「〇〇〇なお話 しょうかいます！ — 『いろはにほへと』を起点として—」の実践から —

### 1. 授業の構想

本学校園の国語科においては、読み取ったことを表現し、児童どうしが互いにかかわり合いながら理解を深めていくことを大切に実践を重ねている。物語や説明文の読み取りをはじめ、これらの学習から発展した読書活動においても、読んで感じたことを表現し、かかわり合う活動を展開することで、自分では手に取ることもなかった本にも興味を強くひかれ、自らの読書生活を豊かにしていくことへもつなげていくことができるであろう。本単元はそのような思考・判断にもとづいた表現活動による「かかわり合い」に重点をおき、自らの読書の幅を広げていくことをねらって設定した。

本学級の児童に対して読書の傾向をつかむアンケートを行ったところ（2009年5月実施）、好きな本は、という問いかけに対して、挿絵が現代風の文庫本を中心とした読み物を積極的に読んでいることが明らかになった。実際に児童が朝読書の時間などに読んでいる本を見ると、アンケートに答えたような本を手にしていく姿をよく見る。つまり、積極的に本を読んではいるが、ジャンルにやや偏りがあるといえる。そのためにも、意図的な読書活動を行っていくことの必要性が強く感じられた。また、好きな本を知ったきっかけについても聞いたところ、多くが親やきょうだい、友だちからの紹介ということで、第三者を通して本の世界を広げていることが分かった。本学級の児童の特長として、他者のよさを積極的に認め、よさを共有しあえるというあたたかい雰囲気をもっており、男女間でも本を紹介し合うことがよく行われていることが、先のアンケート結果からも明らかになっている。こうした児童の実態から「かかわり合い」に重点をおくことは、本学級の児童にとって主体的に読書の新たなジャンルを開き、読書活動の充実をめざすために有効であると考えられる。

以上のことをふまえて、物語「いろはにほへと」を起点として、物語の時代背景と展開などから関連が見出せそうな落語や笑い話を扱った本への読み広げを期待して本単元を設定した。これらの本を扱った意図としては、本学級の児童がすすんで読んでいるジャンルではないこと、我が国に古くから伝えられていて、人々の間にも親しまれ続けてきた優れたことばの文化にふれてほしいこと、という2つの理由からである。落語・笑い話を扱ったジャンルは、幼い子どもたちでも十分に楽しめるように場面設定や展開を易しく分かりやすくしてある絵本から、もともとこのようなジャンルが好きでたくさん読んでいる児童でも読みごたえのあるような内容の本まで、多数の本が存在する。こうして易しいものからやや難しいものへと、選書できる幅が広く、あまり触れたことのない児童でも適切な選書をするることによって抵抗なく読みを進めていくことができるであろう。また、本学級の児童はおもしろいと感じたことに強い興味をもち、追求をより深めようとする傾向が強い。よって、学級全体で「昔のおもしろい話」として読み合っていくことで、ことばの言い回しや文体など、古くから伝わる優れたことばの文化について扱った本であるうえにユーモアあふれる内容であることから、主体的に読もうとする姿を期待することができる。

こうした本へといざなう物語「いろはにほへと」は、殿様や侍が活躍していた時代に、幼い「かっちゃん」が唱えていた、習ったばかりの「いろはにほへと」が侍や家老に伝わり、ついには殿様までもが上機嫌になって国は戦までもが避けられた、という意外な展開で締めくくられる。強そうな侍やご家老が誰かとぶつかったと勘違いして思わず謝るといふ登場人物のコミカルな行動、たったの7文字が子どもから殿様にまで伝わるという奇想天外な展開、その結果としての意外性のある結末など、児童がおもしろさを中心に興味を惹かれそうな要素が随所にある。こうした要素をおさえおくことで、同じような時代背景をもち、奇想天外な展開や意外性のある結末、登場人物のコミカルな行動などにおもしろさを感じられる落語や笑い話の本との共通点を見だし、それらの「昔のおもしろい話」を読もうとするきっかけをつくっていくことが期待できる。

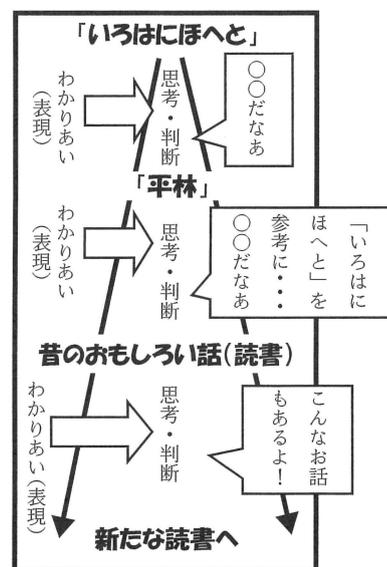
本単元は、「いろはにほへと」のお話に出会い、感想をもつところから始まる。「おもしろいな」「す

「いいなあ」「よく分からないなあ」などそれぞれが感じたことを理由も交えて全体でお話していくことを第2・3時における読み取りの中心としていきたい。つまり、自分が「おもしろいなあ」「すごいなあ」などと思ったことについてその理由を発表し合い、友だちの発表を聞くことによって、自分では気づき得なかった読みの判断を獲得することで読みを深める、ということである。この活動が、後の読書紹介で自分で読んで「〇〇な点」を思考・判断していくことへとつながっていくであろう。

第2次では、「いろはにほへと」と関連が見出せる「昔のおもしろい話」である落語「平林」に出会わせる。「いろはにほへと」の読み取りと同様、各自が文章から感じたことをわかり合う場をもって、読みを深める。そうした段階を踏んだ上で、教師が用意した「昔のおもしろい話」の本を見せ、読みたい、という意欲を高めたい。これらの本は、公立の図書館（松江市立図書館、島根県立図書館）から借りてきて学級内に置いておき、手軽に読むことができる環境をつくる。

第3次では、お互いに読んだお話から自分の気に入ったお話を紹介する。「いろはにほへと」のお話や第2次の最初に出会ったお話を読んで思考・判断したことをわかり合う場を繰り返し行っていることで、展開全体や登場人物の行動などに注目して、気に入った理由も述べるができる姿を期待したい。こうして気に入った内容を具体的に紹介することで、紹介された側が興味をもって読めるようにしたい。紹介する際には、上記の内容をカードに書くが、今までの学習を生かして自分なりに見つけたおすすめポイントをあえて書かず提示するなど、相手をひきつけるような内容を工夫して表現していくようにしたい。このカードをもとに互いに紹介し合う時間を設け、その時間を受けて新たなものを読む、という具合に紹介活動で読む内容が広がっていくようにして、読書の新たなジャンルにしっかりと浸れるような手立てとしたい。なお、紹介を受けて読んだ時には一言感想を書いて互いの思いを交流することで、紹介活動の意義を互いに感じ合い、本単元での学びを実感できるような場にしていきたい。

なお、本単元での期待したい児童の意識の流れを右に示した。下記の展開計画を実際に進めた際の児童の取り組みを次章では述べていきたい。



## 2. 活動展開計画

次	主な学習活動	時	具体的な学習活動	評価
1	「いろはにほへと」のお話に出会い、各自が興味をもった点を中心に読む。	1	・「いろはにほへと」のお話に出会い、初発の感想をもつ。	本文中の叙述に沿って、思ったことや感じたことなど感想をもっている。
		2 3	・「おもしろい」と感じた点など、各自が興味をもった点を中心に読んでいく。	「おもしろい」と思った点など感想をもった理由を、叙述に沿って述べている。
2	「昔のおもしろい話」を読み、紹介したいお話の「紹介カード」を書く。	4	・「昔のおもしろい話（落語：平林）」に出会い、読書活動への意欲を高める。	「平林」のお話を読んで、おもしろいと感じたことを、理由をもって見つけている。
		5 6 課外	・自分が選んだ本を読み、お気に入りのお話について「紹介カード」を書く。（朝読書などの時間も含める）	自分が読んだ本の中からおすすめポイントを見出し、紹介カードに書いている。
3	紹介カードをもとにお気に入りのお話を紹介し合い、読み合う。	7 8 課外	・紹介カードをもとにお話を紹介し合い、互いに本を実際に読み、感想カードを紹介者に書く。（朝読書などの時間も含める）	紹介を受けて本を読み、感じたことや思ったことなどの感想を、友だちに向けて書くことができている。
		9	・感想カードを読みながら、本単元をふりかえる。	本単元で学んだことを書きまとめることができている。

### 3. 授業の実際

一番はじめにこの勉強をしたときは、本にそこまで興味はなかったけど、吉四六さんの話などを読んでいくと、悪い人をとんちでこらしめたりする所などがあるから、おもしろいなあとだんだん思えてきて、本を読むことが好きになりました。 もう一つ思ったことがあって、それは昔の人は頭がいいんだなあということです。理由は、次がどうなっていくかドキドキするような文を書いているからです。ドキドキするような文を書くには、次どうなるか知りたくなるような文を書かないといけないので、頭がいいんだなあ、と思いました。紹介カードも書いたけど、何もしなくても読みたくなる本が、紹介カードのおかげでもっと読みたくなりました。 昔の人たちのちえには、とてもビックリしました。

(A児)

これは、本単元終了後に書いたA児のふりかえりである。彼は普段のくらしでも外で元気よく動き回ることを好む児童であり、自分から読書に取り組むことを見かけることは少ない。昔から語り継がれる笑い話を読み、そのおもしろさに浸ったことで、最初の下線部のように読書が好きになり、さらに次の下線部のように昔の人の知恵に驚いている。それらの読書活動を支えたのは最後の下線部にあるように「紹介カード」であり、友だちから紹介されたことによって、より意欲的に本を手にとりていったことがうかがえる。本単元においては出会ったお話や本から思ったことや考えたことをわかり合い、その活動を生かして本を紹介し合うという、かかわり合いを大切にして展開した。つまり、思考活動の深まりを表現活動に生かした展開であったが、その結果、上記のA児のような思いに至った過程を、以下に検証していきたい。

#### (1) 物語から感じたことをわかり合うことで、各自の思考を深める ～「いろはにほへと」の読み取り～

単元の導入では、物語への関心を高めるために「いろはにほへと」と聞いて、知っていることを出し合った。音楽室にある机に書いてある音名の「イロハニホヘト」、さらに人気漫画の登場人物ということなども出たが、そんなことばは知らない、という児童が大半であった。こうしたやり取りをすることで、児童からは「お話を早く知りたい」という声が高まり、教師が読み聞かせ、初発の感想を書いた。

#### 【児童から出た感想（主なもの）】

B児：子どもからおとなまで、みんなが「いろはにほへと」にはまったことがおもしろい。

C児：「いろはにほへと」と言いながらぶつかった人を笑っていて、またぶつかったのは天ばつだと思った。

D児：ぶつかって、ぶつかって・・・、どんどんえらい人になっておもしろい。

感想をわかり合う場では、上の3人の児童の感想にあるように、出来事どうしのつながりや登場人物の関係性など、物語全体をとらえたうえでの自分になりて思ったことを次々に発言する姿が見られた。わかり合いが進むにつれ、出てきた考えをもとに新たに考えたことを出し合う姿が見られた。以下はその授業場面である。

T：他にも読んでみて思ったことはあるかな？

C：ぶつかる人が偉くなっていくと、ぶつかるものがどんどんかたくなる。

C：ほんとか。たしかに。すごーい・・・。(口々に)

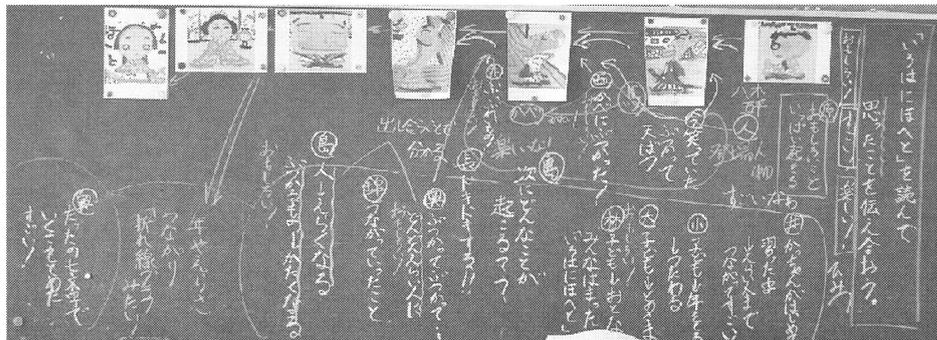
T：人のえらさとぶつかるもの関係を見つけていて、たしかにすごね。

C：かっちゃんから始まって殿様まで伝わって、お姫様まで伝わるのは、年(年齢)や偉さが、まるで「折れ線グラフ」みたいにつながっている。

ぶつかる人ともとの関連性、登場人物どうしの関連性など、物語全体の構造をより多角的にとらえておもしろさを見出している。容易な内容の読み物なので、上述のように初発の感想の時点でおもしろさを多様に感じ取ってはいたが、中にはなかなか見出せない児童もいた。こうして互いの思いや考えをわかり合う場をもつことで、自分だけでは見出すことのできなかつた新たな読みの視点を獲得していき、各自の思考がより深まっていったのである。以下に、この時間におけるふりかえりを紹介する。

今日は、みんなが自分で読んだだけでは分からなかったことや分かっていたことでも、もっと深く分かってよかったです。たしかに！と思ったことは、D君の「ぶつかる人がえらくなっていくと、ぶつかるものがどんどんかたくなる。」ということで、みんなで発見できたことだと思います。だから、みんなで出し合ったら色々なひみつが分かったり、分かっていたことがもっと分かったりして、おもしろいなあ、と思います。(E児)

E児は、みんなの考えをわかり合うことを「おもしろい」と表現している。この児童は「おもしろいことがたくさんある」という感想にとどまっていたので、こうした具体的に「おもしろい」ことを言ったD児の考えに強く惹かれたのであろう。



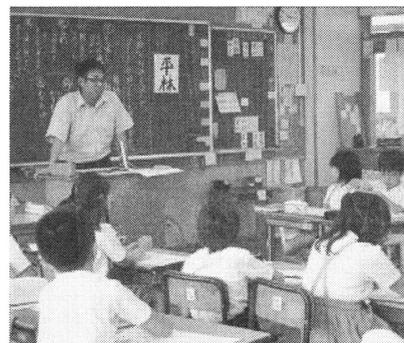
この時間の板書

この時間のふりかえりには、E児のように「自分では思いつかなかった」ことが分かったことにふれたものが数多くみられた。わかり合うという学習の価値に気づくことのできた表れであるといえよう。

(2)「いろはにほへと」から「昔のおもしろい話」へ ～わかり合いで思考を深めながら～

①「昔のおもしろい話」との出会い ～落語「平林」を読んで～

第4時では、「いろはにほへと」から「昔のおもしろい話」へのいざないとなる、落語「平林」を児童と出会させた。「平林」を選んだ意図は、「いろはにほへと」のように1つのキーワードがテーマとなって登場人物のおもしろさが出ている様子、例えば登場人物が「ひらばやし、ひらばやし・・・」と忘れないように歩くさまは「いろはにほへと」のかっちゃんと同じものがある。このことから、児童は「いろはにほへと」の読み取りを生かして「平林」でもおもしろさを見出し、「昔のおもしろい話」への興味を高めながら、読みをつなげていくことを期待できると考えた。「平林」を読み、児童が見つけた「おもしろさ」を以下に紹介する。



F児：「ひらばやし」という読み方がどんどんちがった読み方になったり分解した読み方になっていったりしたこと。

G児：権助が読み方をたずねた人が、全員ちがう読み方を答えたこと。

H児：「いろはにほへと」のように「かわっていく」こと。「いろはにほへと」ではぶつかる人が変わり、「平林」では名前が変わっていった、似ていておもしろい。

I児：自分が聞いたことのある「平林」の話と、なんだかちがうところがあること。

お話全体を広くとらえ、下線部にあるような多様な視点から「おもしろさ」を見出していることが分かる。この時間では、おもしろいと感じたところを各自が文章を読みながらじっくりと思考する姿が見られた。中でもH児は「いろはにほへと」との関連性を見出して次々に変わっていくおもしろさを見出している。「いろはにほへと」においてみんなの読みをわかりあったことが活かされている一つの姿である。この時間には前時同様、各自が感じたことをわかりあったが、「おもしろさ」にスポットを当てて読み広げたことで、新たなジャンルに興味を見出した児童の姿が、この時間のふりかえりからみられた。

今日は落語を勉強しました。私は落語なんて最初は全然きょう味がありませんでした。でも、この勉強をして「落語っておもしろいな。」と思いました。特に、名前が「ひらばやし」から「ひとつやっつにとうきつき」になるところです。私は「まんじゅうこわい」という落語を聞いたことがあります。また落語の本を読んでみたいです。(J児)

## ②「昔のおもしろい話」を読み、紹介し合う ～表現活動のための思考の深まり～

第4時の終末には、約40冊の「昔のおもしろい話」に出会い、次時からの読書に期待を高めていた。第5時では読む時間をじっくりとり、第6時から紹介カードを書き始めたことで、読む時間をじゅうぶんに確保して全員が複数のお話にふれることができた。

この紹介カードであるが、1. で述べたように、自分のおすすめポイントを短いことばで紹介する形式のものである。(実際のもは右下参照) これまでに会ったお話では、交流活動によって読み取り、

個々の思考を深めていったのであるが、この紹介カードは、いわばその総まとめ的な位置づけとなる。「おすすめポイント」を相手に伝える、という活動によって、読んでどこがおすすめののか思考し、ここがポイントであると判断したことを、カードとして表現するのである。

わたしのおすすめ「おもしろ話」 名前	
書名	日本の笑いばなし
お話の題名	頭にカキの木
おすすめポイント	私は このお話で 三太郎という 男の人の頭に カキの大木 ができて 町に売りに い、たら木をさらわれてしまった。 何が何か 眠る から読んでたしかめてみてね

(K児のカード)

わたしのおすすめ「おもしろ話」 名前	
書名	（ぼんやり）
お話の題名	気がわい 人ね
おすすめポイント	前回の11冊と 思、たら人ど かす 寝て... 11冊か ある?

(L児のカード)

そこで、紹介カードを書く際には、「相手が読みたくなるようなカードを書こう」というめあてを設定した。「相手が読みたくなる」ためにどうすればよいか、という話し合いの中では「続きは読んでみよう、と書いてみる」「おすすめは〇〇〇です」という具合に、おすすめしたいところをあえて書かないという手法が出された。以上のような表現上の工夫が、右上に紹介した2人のカードには共通してみられている。

こうして紹介カードを書き、実際に紹介し合うという活動をした後、紹介者へとひとこと感想カードを書く場を設定した。こうした交流の場を設定することで、自分のカードによって友だちと読んで心をひかれたところを共感し合ったり、読書意欲を喚起したりという活動への有用感を見出すことをねらったものである。上記2名のカードに対して、以下のような感想があった。

Kさんへ：本当に笑えるお話でした。Kちゃんがおすすめポイントで「次に何がはえるかな」と書いてくれたおかげで、  
どんなことが書いてあるのか楽しみになりながら、本当に楽しく読めました。(M児)

Lさんへ：カードの書き方が、とてもきりのいいところで終わっていたので、つい読みたくなってしまいました。  
(N児)

本單元においては多くの本を教室に持ち込んだが、たくさんの本の中から選ぶ際の視点を生むために大きな役割を果たしたのが、構想でも述べた「交流活動」である。こうして各自が表現したカードをもとに「交流」の場を設定することによって、N児が書いているように「つい読みたくなる」という気持ちを高めることができた。

以上のような過程を経て、本章の冒頭に述べたA児のふりかえりがなされたのである。

## 4. 成果と課題

### (1) 成果

#### ①児童の意識の流れに重点をおいた単元の枠組みから

本單元では紹介活動での前提として「いろはにはへと」や「平林」において、おもしろいと感じたところなどをわかり合い、お話のおすすめのポイントを自分なりに見つけ出す学習に取り組んだ。こうして各自が思考し、おもしろいなあ、などと判断できたことをわかり合うことで、紹介カードの内容を自力で考え、工夫した表現をするに至った。すなわち、1. で図示したような思考・判断し、表現するという流れを連続的に仕組んだ展開が、終末の表現活動の充実へとつながったといえよう。

## ②交流活動の充実

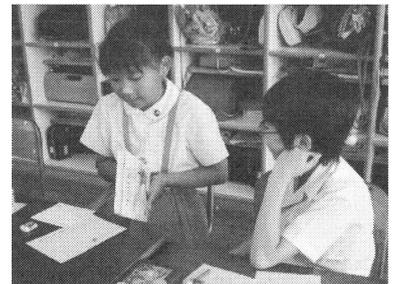
3. の冒頭におけるA児のふりかえりの中で「紹介カードも書いたけど、何もしなくても読みたくなる本が、紹介カードのおかげでもっと読みたくなりました。」という一節があった。このことばが示しているように、紹介カードを通した一連のやりとりによって、新たな読書のジャンルが広がったこと、すなわち、単元での取り組みの総まとめとしての表現活動によって、新たなジャンルのよさへの気づき、という思考・判断へと進んでいったことが本単元での成果といえるであろう。3. の最後に感想を紹介したN児は単元のふりかえりにおいても以下のように書いている。

(前略) L君の紹介カードを見ると、読みたくする工夫がありました。それは、この先どのようになるかを考えさせる工夫です。L君のカードは「この先どうなるのかな」と思い、どうしても読みたくなります。「へびかんけいある？」とあったけど、その文を読むとお話を読みたくてうずうずしてしまいました。(後略) (N児)

感想の交流直後にN児がL児へと送った感想は先に紹介した通りであるが、少し時間をおいた単元のふりかえりでも、交流活動のことを書いている。この活動がN児にとって読書意欲をじゅうぶんに喚起していたといえよう。さらに、J児の単元のふりかえりである。

私はこの勉強をするまで、落語などには一切きょうみがありませんでした。でも、「平林」で「落語っておもしろいな。」と思いました。そして自分で選んだ本を読んで・・・、と学習をすすめました。みんなで紹介をしあって本を読み合い、感想を書きました。私は「落語絵本シリーズ」を読んできて、他の「らくご長屋」「吉四六さん」などは読まなかったけど、紹介しあって「この本おもしろい」と思えたり、今まで読んでことのない本を読んだりできたのでよかったです。紹介された本の中でも読書の時に「吉四六さん」はあまりきょうみがありませんでした。でも、紹介し合って「この本にはこんなおもしろさがあるんだなあ」と思いました。図書館に行ってまた読んでみたいです。(M児)

落語などの本単元で扱ったジャンルの本にはこれまであまり興味を示さなかったM児は、「平林」のお話で興味をもち、さらに紹介活動を通して様々なお話にも興味を広げていっていることが分かる。こうして、本単元における思考・判断・表現という一連の流れが、新たな読書のジャンルのよさに気づき、本単元の主なねらいである、主体的に読書の幅を広げようとする意欲へとつながっていることがうかがえる。それを支えたのが、表現したものの交流活動であったといえよう。



## (2) 課題

### ①読書の幅を広げるために

紹介し合う、という交流活動で児童は読書意欲を喚起され、自ら様々な本を手にとった。本学級における紹介活動が一定の成果を上げたことを物語ったものである。本単元では落語などのお話への広がりを見せたが、実際に児童の前には広大な本の世界が広がっている。しかし、実際に手にとって見るのはほんのわずかであり、選書の段階でかなり多くの本がふるいにかけてられ、読まれていないのである。その中には、児童にとって大きな影響を与える可能性を秘めた本もあるに違いない。そのいざないのためにも、単に本を教室に持ち込むだけでなく、今後も本の紹介をし合う場を機をみて設定していきたい。こうした表現活動を織り込んだ読書に親しめるような場づくりを積極的に行うことで、児童一人ひとりの読書の幅がより多様なジャンルへと広がっていきけるようにしていきたい。

### ②思考・判断・表現の一連の流れに重点をおいた 学習活動をより充実させていくために

本稿で述べたような学習活動をより有効に行うためには、学んだことをもとに思考・判断し、互いの考えを表現し合うという一連の活動を、幼小中11年間の育ちの中で系統立てた構想をしていくことが大切であろう。そうした大きな枠組みをつくっていくことで、それぞれの学年段階にあった読みの素材、表現のあり方などの具体的手立てが見えてくるであろう。現段階で着手しているこのような11年間の系統的な「読むこと」指導のあり方が今後具体化していくことで、児童・生徒の思考・判断・表現という意識の流れに重点をおいた、より充実した単元の開発が期待できる。(文責 喜多川昭博)